岐阜県可児市立南帷子小学校

問い合わせ先:電話番号

0574 - 65 - 4181

I 学校の概要

1 児童生徒数,学級数,教職員数

(平成21年1月現在)

児童生徒数	468名
学級数	17学級(内特別支援学級2)
教職員数	23名(含 校長・教頭)

2 地域の概況

昭和 55 年 4 月, 帷子小学校から分離開校した創立 29 年目の学校である。岐阜県と愛知県の県境に位置し、4 つの大型団地を校区とし、名古屋経済圏に隣接していることもあって、活気のある都会的な雰囲気の学校である。

地域・保護者の学校教育への関心は高く、学力や心の 教育など今日的教育課題が要望として出されることも多い。また、地域の人々によるボランティア「みなかたサポーター」の活動が広がりをみせ、登下校時の見守りを はじめ、様々な協力が得られている。

挨拶がよくでき、落ち着いた生活を送ることができる 児童が多い。地域性から自然体験が豊かな児童は少なく、 動植物の飼育や栽培、環境調査、保全活動等に取り組む 機会を意図的に設定することを大切にしている。

長年にわたり、学校のグランドに隣接する雑木林の小山「わんぱく山」を題材として、その活用と保全の取り組みを行ってきた。これまでに、全国小中学校環境教育賞や学校関係緑化コンクールでの入賞、愛鳥モデル校の指定を受けるなど環境教育を推進してきた。また、牛乳パックのリサイクル活動や雨水の再利用等で「ぎふ学校版環境ISO」の認定証を受け、現在でもその取組を継続している。



これまでに、5年生が「わんぱく山」を総合的な学習の時間の中心題材として取り上げ、その歴史を調べて発表したり、児童が進んで土のう積みをして環境保全活動を展開したりした。その成果を全校へ発信したのはもちろんのこと、可児市環境フェスタでも市民に対して保全活動の大切さをPRした。その他、「わんぱく山」での活動としては、1・2年生が生活科で学習したり、4年生が理科で四季の植物の成長や変化について学習したりした。また、全校での土のう積み、「わんぱく山」発表会、「わんぱく山」オリエンテーリングなどを通して、身近にある小山の自然に興味をもち、自然に感謝する活動も推進してきた。

平成19年度には、グローブ校の指定を受けて、平成18年度の活動の継続以外に5年生が「気象観測」を継続的な活動として取り組み始め、4年生が「動物飼育」も総合的な学習の時間の題材として取り上げ、自然環境に関わる学習に取り組み始めている。

平成20年度は、環境学習活動を広げ、福祉・エコ活動を充実させ、地域に情報発信をしたり働きかけたりして、自分たちにできることを積極的に実践していこうとする力も育成してきた。

3 環境教育の全体計画等



学校のグランドに隣接する雑木林の小山「わんぱく山」 を題材として、その活用と保全の取り組みを行う。また、

地域人材を活用したり, 地域に情報発信を行ったりして 環境に関する学習では, 自分たちにできることを積極的 に実践していこうとする力を育成する。

Ⅱ 研究主題

「自然や社会から地球環境について学び,環境保全の活動に積極的に取り組む態度の育成」~地域の人・もの

・自然から学ぶ「関わり・結びつき・つながり」~ 地域の自然や社会に目を向け、自然環境の大切さについ て学んでいく活動を通して、児童たちに、学校や地域の 環境からはじまり、地球規模の環境まで視野を広げて環 境保全の活動に興味をもったり、参加したりする意欲や 態度を養う。

<研究主題の設定理由>

丘陵地を開発した団地という地域であるがゆえに、田 畑での耕作、生き物の世話、山野を駆け回るような体験 を豊富にしている児童は少ない。そのため、地球の自然 はもちろんのこと, 地域の自然についての知識や関心は とても少ない。そこで、地域の自然や施設等についての 学習から始め、身近な環境学習を進めていきたい。その 児童たちが,「人・もの・自然」と触れ合い, その中か ら課題をみつけ、自分たちで取り組み、解決していく営 みをしていくことは,人間形成の上で重要なことである。 学年発達に応じて,自然体験や調査活動,生き物の世話, 環境保全活動に従事している人々との交流、等々を行う ことにより、豊かな感性を磨き、自然や社会から積極的 に学んだり、働きかけをしたりする態度を養っていきた い。そして、徐々に視野を広げて、最終的には地球環境 の規模の知識を広げ、環境保全の活動に興味をもったり、 参加したりする態度を養いたいと考えた。その態度こそ が,将来地球の環境を守っていく姿勢につながると考え, この研究主題を設定した。

Ⅲ 研究の概要

1 研究のねらい

研究主題「自然や社会から地球環境について学び、環境保全の活動に積極的に取り組む態度の育成」の実現に向けて、本校での環境教育のねらいを「仲間・地域・環境・人々・世界との関わりや結びつきやつながりを学び、自分たちの目標をもち、課題を解決する方法を考え、自分たちができることを積極的に実践していこうとする力を育成する」とし、全体計画に沿って取り組んでいく。グローブ推進事業の観測や調査、観察活動は、課題解決のための手立ての一部であると考えている。児童が、自然の事物や現象に対してもった見方や考え方をより科学的にしていくことを大切にすると共に、地球環境を様々な視点から学び、環境保全のために自分たちが取り組めることを実践し、地域に発信していこうとする態度を育

成していく。身近な事物や現象を教科や総合的な学習の時間の調べ学習の中で,より広い視野で考えて取り組んでいくことができるようにしていきたい。

2 校内の研究推進体制

(1) 研究推進体制

- ・生活科では自然を活用した学習,理科では生物や 気象の学習,総合的な学習の時間では身近な自然 環境を調べる活動を通して,環境保全に目を向け させる。
- ・児童委員会活動ではエコキャップ回収など身近に できる福祉・エコ活動の取り組みを進める。
- ・外部人材を積極的に活用する。

授業

ア, 教科指導

学習指導部を中心に、各教科の指導内容を検討し、環境にかかわる教材を意図的・計画的に指導する。 また、地域の人材を積極的に活用し、環境保全活動 に従事している人々からも学ぶようにしていく。

イ,道徳指導

内容項目3の「主として自然や崇高なものとのか かわりに関すること」を意識して指導し、次のよう な心を育てる。

- ・自然の素晴らしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする。
- ・生命の尊さを感じ取り生命あるものを大切にす る。
- 美しいものや気高いものに感動する。

ウ, 特別活動

生活指導部を中心に,特別活動の指導内容を検討し,環境にかかわる題材を意図的・計画的に指導する。

エ,総合的な学習の時間

学習指導部,研究推進委員会を中心に,各学年の活動内容を検討し,環境にかかわる内容を意図的・計画的に指導する。また,各学年で環境にかかわる情報発信を心がけていく。

② 児童会活動・子どもエコクラブ活動

生活指導部,児童会担当を中心に活動を展開し,アルミ缶回収の活動などのリサイクル,リデュース・リユースについての関心や知識を培う。また,福祉・エコ委員会のメンバーが,子どもエコクラブに登録し,地域に情報発信をして地域との連携も図る。

③ 観測

教頭,教務主任を中心に全校での指導体制を確立してきている。観測は,主として4・5年生が行う。グローブ観測は希望者が当番制で行う。

④ 外部人材の活用

地域の専門家をはじめ、県や市の専門家の指導を受けながら研究を進めていく。

(2) 観測体制

5年生児童の中から,グローブ観測の希望者を募集 し,曜日別の当番児童が午後1時に大気観測を行う。 4年生は,年間を通して,自分の木を決め,成長や変 化の様子の観察を行う。

(3) 観測機器などの設置状況

百葉箱・「わんぱく山」の位置





3 研究内容

(1) グローブの教育課程への位置付け

①1年生:生活科や図工(自然物を活用した遊び等)

②2年生:生活科(地域の自然探検,自然物の活用)

③3年生: 社会科(地域の土地の活用探検)

④4年生:理科,総合的な学習の時間,特別活動 (樹木の観察記録・情報処理・生物飼育)

⑤ 5 年生:理科,総合的な学習の時間,特別活動 (天気の変化,雲の観測,「わんぱく山」保全)

⑥6年生:理科,総合的な学習の時間,特別活動

(地球の温暖化,国際理解教育,環境を守るための活動)

⑦全学年:道徳指導

(自然愛, 動物愛護, 生命の尊重, 敬けん)

8 その他

(登校後や休み時間等を活用してエコ・福祉活動を 推進)

(2) グローブを活用した教育実践

① 実践例1(4年生:樹木観察)



ている。本校の元教師である木村克先生に来ていただ き,指導助言をしていただいている。

7月に行った夏の樹木の観察より

(児童の感想)

- ・木村先生から枝の色が変わっているところをみる といいよと教えてもらったので、枝の色にも気を 付けて観察できた。
- ・ぼくは、ヤマザクラの実を見つけたよ。 5 mm位の まん丸の赤い実だった。 ちっちゃなサクランボみ たいだった。これから大きくなるか楽しみです。
- ・木村先生が「葉っぱのすじは葉脈で、水分が流れて、葉っぱの先の方まで運ばれているよ。」と教えてくださった。私は、その水分がどこへ行くのか不思議でした。勉強の最後に、水分は葉っぱにある顕微鏡で見ないと分からないくらいのちいちゃな穴から出ていくことを教えてもらったので、夏休みにお父さんに顕微鏡で見せてもらいたいなと思いました。
- ・切った木を見せてもらったら、丸い輪が何重にも ついていました。木村先生が「これで木の年齢が 分かるんだよ。」と言われました。ぼくは、なる ほどと思いました。A君が「年輪っていうんだよ。」 と言っていたので、ぼくは、A君はよく知ってい るなと思いました。
- ・木の博士の木村先生が「アラカシの枝に付いている小さな実(どんぐりの赤ちゃん)を見つけよう。」と言われたので友だちと見つけて先生に聞いたら、「よく見つけたね。」とほめてもらえてうれしかったです。

児童の感想に表れているように, 先生から教えていた だいた的確なアドバイスにより, 児童は, 対象物を漠然

と観察するのではなく,ポイントを絞って観察しようと していた。

11月に行った秋の樹木の観察より (児童の感想)

- ・秋になって、夏の頃は、小さかった木の実が大きくなってきた。もう、落ちてしまったのもあったけれど、木の根っこから栄養を取り入れて大きくなったのだと思う。わんぱく山の土に栄養がたくさん入っているとは思えないけど、栄養は、どこから運ばれるのか不思議だ。木村先生に聞いたら、「光合成」という仕組みがあると言われた。「光合成」がよく分からなかったので、もう一度聞いたら、「太陽の光の力で栄養ができる仕組み」だと言われた。太陽の力で栄養ができるとはすごいと思った。
- ・葉っぱの色が黄色くなったり、赤くなったりしてきている。木村先生の話では、葉っぱの中の糖分が変化して、赤や黄色の色素になるということだった。自然の力で変化する仕組みをもっと調べてみたいと思った。自然の力ってすごいなと思った。・中庭のグリーン広場に、「スダジイ」というシイの木があって、ドングリがなっていることを教えてもらった。「スダジイ」のドングリは、2年かかって大きくなることが分かった。春にグリーン広場の掃除をしているとき、花が咲いたときにすごく強いにおいがしたことを思い出した。



指導者に年間を通して来ていただいているので、児童 の質問にも分かりやすく答えていただける。

4年生の児童は、2月の観察が終わると、1年間のまとめをパソコンを使って行う。

② 実践例2(5年生:環境保全)

5年生の総合的な学習の時間では、「わんぱく山」の環境を守りながら、活用していく活動を工夫してきた。わんぱく山は、遊び場として活用しすぎて、山土が流失している現状があるため、土のう積みをして山を保全してきている。本年度は、児童の願いを地域の方々に聞い

ていただく会を開き、自分たちの力ではできない所を助けてもらえるように頼んだ。その結果「わんぱく山再生助っ人隊」ができて、可児市の東端に位置する久々利生産森林組合の所有林で間伐材を切り出して、運んでいただくことができた。その間伐材の皮むきは、児童の力で行った。間伐材は、間伐してから時間が経過していた木だったので、皮むきが大変だった。階段作りの設計は、岐阜県立国際園芸アカデミーの藤原教授、相田准教授に行っていただいた。階段作りの枠作りは、学校職員が行い、その後の整備は、専門家に教えてもらいながら、児童が中心に行った。





腐棄土運び

階上のにるこたみ集て混のく袋のるに葉環をいなをた込果たと横土入土境教たでし腐ん、らこにのなをた込果たとにかれをにえの落て葉だし土からか袋土れいい、葉っをそらう、

階段づくりでは、



小さな芽がでてきたので、感動する児童の姿が見られた

分たち 集 重くて大変だったけれど、 のう袋に入れる土は、校庭のう袋に入れる土は、校庭 σ で切 力による階段 苗木を 作 庭 σ なで協力した。土を平ら 土のう 作り 運び 込めてドングリーしいという願い。 に大きく育って 木を植 のう袋の端 えた。 0 のを欲所

本校は、わんぱく山再生のために「学校環境緑化モデル事業」の助成も受けた。間伐材を使ったウッドブロック工法について岐阜県立国際園芸アカデミーの藤原教授に教えていただき、土砂流失の多かったわんぱく山の第3ステージの斜面を補修し、市内にある日本ライン花木センターの専門家に植樹の方法を学び、10月に山モミジや山ツツジなどの植樹活動をした。



③ 実践例3 (6年生:地球温暖化を学び、

環境を守るための活動)

6年生の理科や総合的な学習の時間では、光合成の学習や地球環境と生物の関係、国際理解の学習を進めている。5年生の時に、NPO法人「どんぐりモンゴリ」の事務局長である角和さんに来ていただき、牛乳パックでドングリの実から苗木を育てる活動に取り組んできた。

その苗木が、育ってきたので、10月に水源地である 東白川村の山に植樹に行った。

をして確かめることもできた。だき、温暖化の原因について実験気象予報士の大隅さんに来ていた





苗木もあった。

苗木もあった。

ですってきた。夏の水やりたドングリの苗木は、順調たドングリの苗木は、順調



とができた。 牛乳パックは土に返ることも学ぶこま植えることで水分が保たれるし、牛乳パックの底を切り取ってそのま

植樹活動に参加して(担任の感想)

5年生の時に「100年先の森のために、水のために」という願いをもって活動してみえるNPO法人「どんぐりモンゴリ」事務局長の角和さんに来ていただき、「ドングリパワー、不思議の話」をしてもらい、牛乳パックを利用してドングリを植え、苗木づくりをした。そのときに、ドングリにあるクルボ酸が鉄分と結びつき、海のプランクトンにとってよい環境をつくり、貝類や魚類にとって大切であり、「山は海の恋人」といわれることを学んだ。子ども達は、山に植林をすることの大切さを知り、自分たちもぜひ、水源地の森に植樹したいという願いをもっていた。その願いが届いて東白川村まで、バスで植林に行くことができた。

学校の近くには、川がないので、植林する場所の 近くで、川に入る体験もさせることができた。

植林の時には、角和さんの他に、加茂総合庁舎の 農政課の安江さんにも来ていただいて教えてもらっ た。植樹の前に雑草を取り除き、ツルハシやスコッ プで固い地面を掘った。大人でもかなりの力が必要 だったが、子ども達はあきらめずにがんばっていた。 自分たちが大人になったときに、この木がどのくら いに育っているか楽しみだという感想を話す子もい

体験を通して、子ども達の意識が深まってきた ことを関係の方々に伝えていきたい。

④ 実践例4 (子どもエコクラブ活動)

児童の福祉・エコ委員会のメンバーは、全員が「子どもエコクラブ」に登録をしてエコ活動にも取り組んできた。特に本年度は、これまでの牛乳パックやベルマークなどの回収活動に加えて、ペットボトルキャップの回収をスタートさせた。全校朝会でみんなに回収することの意義を伝え、地球温暖化防止に役立つだけでなく、発展途上国の子ども達のワクチン代になることで、国際協力にもつながることを学んだ。ペットボトルキャップは1月末現在で8万4000個を集め、105人分のワクチン代として寄付できる状態である。



最近は、地域の方々も持ってきてくださるようになった。ペットボトルキャップ以外のキャップは取り除いて集まった個数を数えながら袋に入れている。

また、昨年度の中間報告で報告したオイスカ交流会は、本年度も2月に実施した。昨年度のベルマークや学用品などの寄贈について、タイからお礼の手紙が届いた。オイスカが進めている「子どもの森」計画への参加は国際的な視野を育成していくことにつながっている。

⑤ 実践例(情報発信)

環境学習の取り組みは、岐阜県の「環境パビリオン」へも情報発信をしている。また、毎年、学習の中間成果を10月の「わんぱく山発表会」で、地域の方々に伝えてきている。今年度は、12月に「グローブ日本生徒の集い」でも発表することができた。発表の希望者が多く選抜された4名が参加し、全国の仲間と交流することができた。代表の児童は、全国の仲間の発表を聞くことで、自分の考えを深めた。



「わんぱく山発表会」では、学年別に総合的な学習 等の中間発表をした。(雨天のため、体育館で実施)



全国 2 0 校の仲間の前で環境教育の取り組みについて堂々と発表し、討議にも積極的に参加できた。

生徒の集いに参加して (代表児童の感想)

私は、「グローブ日本生徒の集い」に参加して、 自然・生き物・天気・環境などたくさんのことにつ いて考えを深めることができた。その中でも、いろ いろな人たちの話を聞いて、「もっと、知りたい。」 「もっと、調べてみたい。」と思ったのは、地球温 暖化と世界の人々のくらしについてです。

地球温暖化のことは、たくさんの学校が調べて発表していた。石川県金沢市立長田町小学校では、「環境破壊の原因として、車の台数の増加が挙げられている。」と発表していた。「気象庁の天気予報が天気予報も外れるほど予測不可能な天気の変化が見られる時がある。」ことや「気温が高くなったため、暖かい海に生息する魚が多くなってきている」ことが、実際に日本で起きているということが、他の学校の発表で分かった。地球温暖化は、気温が高くなって北極や南極の氷をとかすだけでなく「産業」や「天気」などにも悪いえいきょうをあたえていることを知って、とてもおどろいた。今ではもう「知らなかった。」だけではいけないと感じました。

·····(以下略)

また、2月の「可児市環境フェスタ」では、5年生の 代表児童が、「わんぱく山の保全活動」について、今年 度の取り組みを発表した。

Ⅳ 研究の成果と課題

1 研究の成果

(1) 児童の姿から(教職員による評価)

① 児童の行動観察

- ・グローブ観察活動は、立候補した5年生児童が当番活動を忘れることがなく、意欲的に取り組んできた。
- ・「わんぱく山保全活動」の取り組みは、自分たちの願いを実現するために、地域の方々に願いを聞いていただく会を開き、専門家からのアドバイスや地域の方々の協力や支援を受けて実施することができた。

② 教科の様子

- ・本校では、校内の研究で、理科も実践している。 児童は、予想や仮説をもって実験や観察に参加し、 問題解決的な学習を進めている。深く、考えて取り 組んでいこうとする児童が増えてきている。
- ・4年生の理科では、年間を通して樹木の観察活動 に取り組んでいる。特に、外部講師も年間を通して きていただき、児童の気付きが深まってきている。
- ・5年生の総合的な学習の時間の「わんぱく山保全活動」では、問題解決のための調べ学習から、自分たちの願いを実践したいという意欲をもち、実践活

動に積極的に取り組むことができた。

・6年生の活動では、昨年度からの児童の願いを実現させるために理科や総合的な学習の時間を関連付けて「植樹活動」に取り組むことができた。自分たちの願いを発信すれば、地域の協力を得ることができるということを実感できるようになってきた。

③ 特別活動の様子

- ・児童会や委員会活動として、「身近な環境へ働きかけて地球温暖化防止のために取り組んでいきたい。」という思いをもって取り組んでいる。
- ・福祉・エコ委員会のペットボトルキャップの回収 活動は、地域の方々からも多くの協力が得られるよ うになってきている。

(2) 保護者による評価から

保護者アンケートにより、本校の「わんぱく山」の継続的な取り組みは、評価が高く、毎年の工夫ある活動に期待も大きい。特に「わんぱく山発表会」として保護者や地域に情報発信をすることで、協力いただける機会も多くなってきている。

(3) 外部評価から

学校評議員会、わんぱく山を考える会では、環境 学習での体験的な活動が、高く評価されている。ま た、可児市では「体験学習」のための事業費の支援 を受け、より充実した学習に取り組んでいる。また、 本年度は、岐阜県の「緑の子ども会議」に参加して、 活動を充実させたり、学校環境緑化モデル事業にも 参加し、環境面で整備できたことも積極的な取り組 みとして評価していただいた。

2 研究の課題

- ・専門家を活用した授業を充実させてきたので、児童 の理解を深めてきた。人材について更なる発掘が必要 であること。
- ・「わんぱく山保全活動」が充実してきているので、 更に児童が自主的に情報発信をしていくことができる ような環境を充実させていくこと。

V 今後の展望

グローブ活動に取り組んできた学校の情報は多くあるので、その情報を整理し発信し、他校や世界との交流を図っていくことも考えられる。

VI さいごに

グローブ参加校としての本校の環境教育の実践は、 観測などの活動を問題解決のための一部として取り組 んできた。地球環境を様々な視点から学び、環境保全 のために自分たちが取り組めることを実践し、情報発 信するという研究のねらい達成に向けて、地域の方々 の支援を受けながら着実に前進してきたことに感謝し たい。